

修士論文(要旨)
2023年 1月

辞書における日本語動詞の自他ペア

指導 青山 文啓 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
219J3009
関 芽吹

Master's Thesis (Abstract)
January 2023

Japanese Transitive / Intransitive Verb Pairs in the Lexicon

Mebuki Seki

219J3009

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Humihiro Aoyama

目次

1. はじめに.....	1
2. 凡例.....	3
3. 子音・母音の組み合わせと拍数	4
4. 二拍の動詞	5
5. 活用型 五段活用と一段活用	5
6. 他動詞 Transitive / 自動詞 Intransitive.....	6
7. グループとタイプ	7
8. グループ(E)	8
9. グループ(F).....	8
10. グループ(I).....	9
10-1. タイプ as/e	9
10-2. トリプレット	10
10-3. 使役形のタイプ as/e	13
10-4. タイプ os/i	14
10-5. オトス / オチル.....	15
10-6. タイプ as/i	22
10-7. タイプ us/i	23
11. グループ(J)	24
11-1. タイプ e/ar	24
11-2. タイプ e/ir	25
11-3. イレル / ハイル	25
12. グループ(M).....	26
12-1. タイプ as/∅	26
12-2. タイプ os/∅	27
12-3. タイプ akas/∅	27
12-4. タイプ akas/w	28
12-5. タイプ w/sar	28
12-6. タイプ kum/gumor	28
12-7. タイプ ∅/or	29
12-8. タイプ ∅/ar	29
12-9. タイプ ow/uwar	30
12-10. タイプ s/nar	31
13. グループ(N).....	31
13-1. タイプ se/∅ 、タイプ asime/i	32
13-2. タイプ e/are	32
13-3. タイプ ∅/e	32
13-4. タイプ e/ore	33
14. グループ(V).....	33
14-1. タイプ ∅/e	33

15.グループ(W)	34
15-1. タイプ e/\emptyset	34
16.まとめ	35
参考文献	i
付録	a

要旨

文のなかで、文字は単語を記すためにある。単語は、子音・母音の組み合わせ、アクセント、拍数、活用という四つの観点から区別される。単語は、子音・母音の組み合わせが同じであっても、アクセントや拍数、活用が異なれば別の単語になる。しかし、文のなかの単語間の関係性について、単語だけでは一般化することはできない。単語は、クラスに分類される。日本語では一般に、六つのクラスに分類することができる。動詞、形容詞、副詞、名詞、助動詞、助詞の六類である。その分類の一つが動詞である。動詞の見出し語形は、語末が/...C-u/であり、拍数が二拍以上の活用語である。動詞には、(a)ひらがなのみで表記される単語と、(b)漢字とひらがなで表記される単語がある。(b)に分類される動詞は、二拍動詞のとき必ず一拍目を漢字、二拍目をひらがなで表記される。三拍以上の動詞であるときも、必ず漢字、ひらがなの順で表記される。

動詞には活用型がある。活用型は四つあり、(o)五段活用、(p)一段活用、(q)サ行変格活用、(r)カ行変格活用である。サ行変格活用とカ行変格活用に分類される動詞は、<スル><クル>のみである。そのため、それ以外の動詞は(o)五段活用、(p)一段活用に分けることができる。動詞の活用型は、動詞の見出し語形を未然形に活用したとき、活用しない部分、つまり語幹の末尾の母音によって決まる。語幹の末尾の母音が、/a/であるとき、五段活用に分類される。また、/i/または/e/が語幹の末尾の母音であれば、一段活用に分類される。

さらに、動詞は、(x)他動詞と、(y)自動詞にも二分される。文のなかで、動詞は名詞と共に共起するとき、格助詞であるヲ格・ガ格・ニ格を介する。他動詞はヲ格・ニ格・ガ格を介し、自動詞はガ格・ニ格、ごくまれにヲ格を介する。つまり、一般に他動詞と自動詞の違いは、文のなかでヲ格を介して名詞と共に共起するかどうかという点にある。文のなかで、名詞がヲ格を介して動詞と共に共起するとき、その動詞は他動詞に分類され、それ以外の動詞は自動詞に分類される。他動詞と自動詞には、ペアをなすものがある。他動詞と自動詞がペアをなすとき、自他ペアと呼ぶ。自他ペアをなすのは、同じ名詞がヲ格とガ格を介して他動詞と自動詞と共有されるどうかによって決まる。

自他のペアは、拍数と活用型の観点から八つのグループに分類することができる。収集した 371 の自他ペアをグループ(E)(F)(I)(J)(M)(N)(V)(W)に分ける。各グループに分類された自他ペアは、さらに各タイプに細分化することができる。ここでタイプと呼ぶものは、他動詞と自動詞それぞれの<語幹>から、それらが共有する部分<語根>を引いたものである。このタイプは 38 に分類される。自他ペアを各グループに分類し、各グループに属するタイプの内訳を比較すると、グループ(V)に属する自他ペアがもっとも多い。グループ(V)は他動詞と自動詞の拍数が異なり、他動詞の活用型が五段活用、自動詞の活用型が一段活用の自他ペアが分類される。グループ(V)には、全自他ペアのうち 78 ペアが分類され、約 21%を占める。また、(V)には 11 のタイプが属する。(V)に分類される自他ペアはタイプの種類も一番豊富であった。一方で、分類される自他ペアが一番少なかったのはグループ(F)で、2 ペアのみであった。これは、全体のたった 0.5%である。グループ(F)に分類されるのは、他動詞と自動詞の拍数が同じで、活用型も同じ自他ペアである。各グループに分類された自他ペアを例にあげ考察すると、ペアをなすと考えるには疑わしいペアもあった。それは文のなかで、動詞はヲ格やガ格を介して共起する名詞によって、用法が変化するためである。形態的に類似し、一つの名詞をヲ格とガ格を介して共起する自他ペアであっても、その動詞の用法は他動詞と自動詞で異なることがある。つまり、用法が違えば自他ペアであるとするのは疑わしいということである。このように、自他ペアは、さまざまな条件を満たしている

のだ。また、自他ペアは動詞の用法についても検討する必要がある。用法は、動詞だけでは決められない。文のなかで、格助詞を介して、どのような名詞と共起するのかが用法を決めるのだ。

他動詞と自動詞について深く考える機会は少ない。動詞は、漢字かな交じりで表記される単語で、送りがなを要する。文化庁が「送りがなの送り方」について示しているが、その方法は非常に複雑だ。その理由は、活用語を同じ品詞動詞で検討しない点と、活用語同士で検討するとき、一方の活用語の語幹部分にもう一方の活用語を含んでいると考えている点にある。動詞においては、自動詞と他動詞に二分でき、未然形から、語幹と語幹を導き出せる。語幹と語根をヒントに、同じ品詞同士で送りがなを予測するのに役立つ。このように、自他ペアは、送りがなの送り方をより単純化する手助けになることが期待できる。

参考文献

- 秋庭太郎／林大／春山行夫／真鍋博 (1967). 「イロハ・アイウエオ・ABC...—記号列の消長—」『言語生活』04
- 安部清哉 (1989). 「常用漢字の送り仮名」『漢字と国語問題』11 65-91
- 岩淵悦太郎 (1970). 『現代日本語 ことばの正しさとはなにか』, 筑摩書房, 169-207
- 岩淵悦太郎 (1977). 『日本語を考える』, 講談社学術文庫, 82-98
- 岩淵匡 (1989). 「表記のゆれ」『漢字と国語問題』11 178-209
- 海保博之 (1987). 「日本語の表記行動の認知心理分析」『日本語学』6(8) 65-71
- 樺島忠夫 (1966). 「表記の分析」『日本の言語学 第1巻 言語の本質と機能』 561-601
- 樺島忠夫 (1975). 「日本語の表記体系」『シンポジウム日本語④ 日本語の文字』 257-298
- 樺島忠夫 (1977). 「日本語の表記体系」『現代作文講座 6 文字と表記』 9-51
- 樺島忠夫 (1987). 「日本語ワードプロセッサへの提言」『朝倉日本語新講座 I 文字・表記と語構成』 174-195
- 北原保雄 (2010). 『明鏡国語辞典 第二版』, 大修館書店
- 日下部文夫 (1977). 「日本のローマ字」『岩波講座 日本語 8 文字』 343-383
- 日下部文夫 (1981). 「表音文字と表意文字」『講座言語 世界の文字』5 45-71
- 日下部文夫 (1983). 「漢字とは-文字論における漢字」『言語生活』378, 16-25
- 国立国語研究所(1964). 『現代雑誌九十種の用語用字』63-68
- 佐竹秀夫 (1986). 「外国語表記法の問題点」『論集 日本語研究(一) 現代編』 407-422
- 柴田武 (1975). 「言葉と文字・音韻」『シンポジウム日本語④ 日本語の文字』 12-102
- 須賀一好 (1981). 「自他違い・自動詞と目的語、そして自他の分類」『国語論集』 543-567
- 須賀一好／早津恵美子 (編) (1998). 「詞の自他の事(『詞の通路より』)」, 「動詞の自他被使動の研究」『動詞の自他』, ひつじ書房, 7-13
- 鈴木孝夫.(1975). 「漢字の音と訓に関する二つの調査」『言語文化研究所紀要』7 159-170
- 武部良明 (1973). 「品詞論と表記法」『品詞別 日本文法講座 10 品詞論の周辺』 84-113
- 田嶋一夫 (1989). 「コンピュータと漢字」『漢字と国語問題』11 229-257
- 田中彰夫(1989). 「漢字依存度の推移」『漢字と国語問題』11 277-299
- 手塚晃 (1987). 「言語・思考の枠組としての文字システムの評価」『日本語学』6(8)
- 鳥飼浩二 (1993). 「自他動詞の認定をめぐる序論」『言語』22(5) 78-85
- 中川芳雄 (1964). 「文法と音韻・表記」『口語文法講座 1 口語文法の展望』 255-276
- 西尾実／岩淵悦太郎／水谷静夫(編) (1944). 『岩波国語辞典 第五版』, 岩波書店
- 西尾実／岩淵悦太郎／水谷静夫／柏野和佳子／星野和子／丸山直子 (編) (2019). 『岩波国語辞典 第八版』, 岩波書店
- 野村雅昭 (1983). 「漢字の現在」『言語生活』378, 52-61
- 橋本四郎 (1975). 「表記」『国語学概説』 38-54
- 林大 (1955). 「書きことばと文化」『毎日ライブラリー -言葉と生活-』 152-171
- 林大 (1975). 「かなづかい・音訓・送り仮名」『言語』4(9) 774-781
- 林大 (1982). 「文字と表記」『図説日本語』 201-279
- 林大・林四郎・森岡健二(編) (1977). 『現代作文講座 6 文字と表記』, 明治書院

- 早田輝洋 (1977). 「日本語と表音文字」『現代作文講座 6 文字と表記』 135-160
- 別宮貞徳 (1994). 『日本の名随筆 別巻 翻訳』45, 作品社
- 水谷静夫 (1987). 『朝倉日本語新講座 I 文字・表記と語構成』 朝倉書店, 196-199
- 水谷静夫 (1987). 「語の表記と語構成」『朝倉日本語新講座 I 文字・表記と語構成』1-19
- 水谷静夫 (1987). 「表記論を背景とした語構成論」『朝倉日本語新講座 I 文字・表記と語構成』109-157
- 南出康世／中邑光男 (2011). 『ジーニアス和英辞典 第3版』, 大修館書店
- 宮島達夫 (1981). 「「文字形態素論」批判」『教育国語』66 21-35
- 森岡健二 (1968). 「文字形態素論」『国語と国文学』45(2)
- 森田良行 (1987). 「自動詞と他動詞」『国文法講座』(6)
- 山口光 (1987). 「表意文字と表音文字」『日本語学』6(8) 81-87
- 山田俊雄 (1977). 「漢字とかな」『総特集=ことばを考える 伝統と現代』(45)
- 由良君美 (1977). 「日本語の文字」『現代作文講座 6 文字と表記』 53-80
- 吉田東朔 (1989). 「明治以降の国字問題の展開」『漢字と国語問題』第 11 卷 1-25
- 吉村弓子 (1987). 「漢字の読み分けにあらわれる統語機能」『国語論究』 104-112
- 渡邊敏郎／E.Skrzypczak／P.Snowden(編) (2013). 『新和英大辞典 第5版』, 研究社
- 渡辺実 (1989). 「常用漢字の音訓」『漢字と国語問題』11 38-64
- NHK 放送文化研究所編 (1998)『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』, NHK 出版
- Tsujimura, Natsuko(1996). An Introduction to Japanese Linguistics. London :
Blackwell. 128-130, 157-166
- 国語研究所「Online Japanese Accent Dictionary」<<http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/>>(2020年6月15日)
- ナロック・ハイコ／プラシャント・パルデ／影山太郎／赤瀬川史朗(2015)『現代語自他対一覧表 Excel 版』<<http://watp.ninjal.ac.jp/resources/>>(2020年6月15日)